



集中コース秋の部開催報告

『森づくりをしていく』

山から里へ紅葉が移り、それとともに寒さが募るようになってきた立冬の候、遠くは大阪や茨城から近くは地元伊那市から、総勢十三名が参加してくれた集中コース秋の部。

初日、日程説明や自己紹介のあと、スタップはこともなげに、ではチェーンソーを使ってみましょうと、ますみヶ丘の一角の怪しげな丸太



体勢で決める

の立つ場所に。ヘルメットやチェーンソーパンツを手渡され、チェーンソーのエンジンの始動方法が説明される。そして、転がっている丸太材の輪切りが始まったのです。下刃で伐り下ろし、上刃で伐り上げる。押し付けず、前後させず。仕上げは回し伐り。さらに実際の伐倒作業の準備に

と地面に立てた丸太で受け口伐りの練習。任意に伐倒方向を決め、立ち位置を吟味して、水平伐りと斜め伐りを幾度となく繰り返しました。午後は、直径巻尺やワイゼ測高器での測樹から。方形のプロットを設定して、胸の高さで直径を、梢と根元を見通して樹高を測る。林齢は切り株の年輪が数えられない場合は所有者に植えた年を聞いておく。こうして収集したデータからヘクター当たりの本数や上層樹高、相対幹距



この木をどの方向に倒すか

比、地位指数、林分形状比を割り出して現状を診断し、どんな山にしていきたいか、今から何年後に次回の手入れをするかなどを考え、施業の方針を立てました。

さらには三日目は、伐木造材のつづきと「ひっぱりだこ」での簡単ウインチ集材。集めたい場所の近くの木に本体を設置したら、材のある場所を見通してみる。真っ直ぐ集められそうもなかったら、滑車を使えば、集材方向を変えることが出来る。赤いキャップに丸太を乗せて引っ張ると、切り株などに突っかかりにくい。合図を決めて二人一組の役割分担作業。…そんな三日間は、アツという間でした。

そして二日目。まず昨日決めた施業方針を発表した後、調査林分に出向いてプロット内で残す木を選んでみました。その後、駒ヶ根高原の現場へ移動し、間伐作業。幹の傾きや枝張りから伐倒方向を決めたら、退避路を確保して、立ち位置を吟味しチェーンソーを無理なく構え、初日に練習した受け口に、「つる」と「追い口」をくわえて伐り倒す。枝払い、根元から梢に向かって幹の左側に進行方向を向いて進み、一瞬のフルスロットルで幹に沿って滑らかに。造材は左足の位置に注意しながら、伐り口の開く。閉じると、丸太の浮き沈みの動きを見ながら、回し伐る。樹種の混交した込み合った林



梢をさがして



育んでいく木を選ぶ

森の状態を調査・把握し、将来を考えた施業の計画を立て、残す木または伐る木を決めて間伐し、材は集めて出す。こうした山を育んでいく





幹に預けて

ための一つの流れのなかで、「何か」を持ち帰って頂けたでしょうか。森林塾は「何か」を提供できたでしょうか。間伐などの森林整備をする機会に、あるいは、近くの山に出かけたときに、自分だったらこの山はこうしてみたい、この木とその木とあちらの木を残して、他の木を伐るとしたら・・・このあたりに軽トラでも入れる道があれば間伐をした丸太を集めて出すことが出来そうだ、などと思いをめぐらせてみる・・・

忘れてしまったことや疑問質問など、遠慮なくご連絡ください。そして、これからも何らかの形でお付き合いをさせて頂ければ幸いです。三日間お疲れ様でした。

今回の内容
集中コース 秋の部
11月5日～11月7日
(木～土)

11月5日(木)

9時

島崎先生の山小屋に集合。早川講師の挨拶と事務局からの日程説明。塾生の方方やインストラクターの方々の自己紹介。

9時35分

班分け・身支度をして小屋近くの現場へ。

10時

到着後、各班でチェーンソーの構造や始動方法、取扱時の注意事項の説明を

受ける。その後、チェーンソーの始動、丸太伐りを行う。下刃(腹刃)で伐り下げ、上刃(背刃)で伐り上げ、そして回し伐り。
11時10分
地面に立てた丸太を使って、受け口伐りの練習。任意に伐倒方向を決め、受け口伐り位置に立つ。水平伐りは直径の三分の一。斜め伐りは45度に。この水平伐りと斜め伐りは一連の作業で。伐った口の前に立ってみて方向の確認。受け口の斜め角度を60度程にしてみることも。



ウィンチのちから

12時

小屋へ戻って昼食。

13時

森林調査についての早川講師の講義。その目的や直径・樹高・林齢の測り方。

13時50分

小屋から程近い現場のヒノキ林へ移動して測樹開始。20m四方のプロットを設置。まずは、プロット内の全ての木の太さを直径巻尺で測る。山側に立ち、胸の高さで水平に。樹高は選抜した数本について測高器で測定。ポールを使って目測もしてみました。林齢

15時

は、42年で。

小屋へ戻って休憩をとった後、データ整理。現状の地位指数と相対幹距比、林分形状比を求め、施業の方針を考えてみる。地位指数は樹種と林齢と上層樹高から。相対幹距比はプロット内本数をヘクタール当りに計算しなおした本数と上層樹高から。林分形状比は平均直径と平均樹高から。こうして、川島班は、現状の地位が18、相対幹距比が18・5、形状比が72となり、60年生時の相対幹距

17時15分

講師講評後、終了。

比が20となるような施業をすることに。小泉班は、地位19、相対幹距比17・3、形状比73・7の林分を20年後の相対幹距比が17となる施業方針を決めました。園田班は、地位20、相対幹距比17・5、形状比73・4の現状に対し、10年後に相対幹距比が18となるように胸高直径が18cm以下のものと34cm以上の木を伐る方針を策定しました。

一日の終わりにメンテナンス

18時30分
バーベキューにビールの交
流会開始。焼きそばも登
場。

11月6日(金)

8時40分

島崎先生の山小屋に集合。
日程説明のあと、昨日決め
た施業方針を各班から発
表してもらい、早川講師の
講評を受ける。

9時25分

調査林分のプロット内で保
残木を選定。暴れ木は伐
り、幹の通直なものを残す
など計画に沿った木を選
んでテープを巻き、全体の
バランスを見る。

10時30分

現場作業の身支度をして、
分乗で駒ヶ根高原の現場
へ。

11時15分

各班で機材を準備して、い
よいよ伐倒。樹幹の傾き・
枝張りから伐倒方向を決
める。退避路の確保や
チェーンソーのバランス、
伐倒にあたっての立ち位
置などの説明を受け、初日



に練習した受け口に、直径
の十分の一の「つる」を残
し、受け口高さの三分の一
の位置で水平に「追い口」
を伐る伐木。幹に沿って一
瞬一瞬のフルスロトル
で枝を払い、4mの長さに
玉切る造材。

12時15分

現場にて各班で昼食。

13時10分

間伐再開。込み合った林分
は、幹の傾きの方向に隣接
木があることが多く、ロー
プをセットした牽引伐倒
や矢を使った伐倒を行う
班も。

15時35分

間伐作業を終了し、機材を
片付けて、小屋へ戻る。

16時30分

鳩吹公園でチェーンソーの
メンテナンス。エアクリー
ナーの掃除の時は、チヨー
ク状態で、カパーをはずし
て、バーとソーチェーンを
分離してバーの溝やオイ
ル孔を入念に掃除。

17時15分

講師講評のあと終了、解
散。

11月7日(土)

8時25分

島崎先生の山小屋へ集合。
各班交代でひっぱりだこ
集材を行うという日程説
明の後、早川講師からウイ



ンで使用時の注意を受け、
昨日と同じ駒ヶ根高原の現
場へ向かう。

8時40分

9時20分

チェーンソーの目立てをし
た後、伐木造材。

10時

園田班から、ひっぱりだこ
集材。本体をベルトスリン
グで保残木に固定し、赤い
木寄せキャップを持った
まま、ワイヤーを丸太のあ
るところまで引っ張る。
キャップに丸太を載せて
合図を送り、引き寄せてい
く。
11時
今度は川島班がひっぱりだ
こ集材。キャップを使わず
に台付けを丸太に付けて
も集材できます。
12時5分
現場にて各班で昼食。休み
時間を利用して早川講師
のぶり縄木登り実演。

13時

早川班ひっぱりだこ集材
滑車と組みあわせれば、間
伐林地でも保残木の間に
縫って集材ができます。

14時20分

作業を終了し、小屋へ。

15時15分

講師総括の後、終了、解散。
お疲れ様でした。

参加者/北原さん、木塚さ
ん、熊木さん、小池さん、
辻さん、刀田さん、中林さ
ん、中村(明)さん、中村
(由)さん、林さん、松尾さ
ん、森川さん、両角さん

講師/早川講師

スタッフ/川島、小泉、園田、
坂野

次回以降の予定

第十二・十三回

12月11・12日(金・土)

炭焼き・きのご菌打ち
復習

樹木分類から始まった通年
コースも、いよいよ今回が最
終回となります。

一日目は、移動式炭化炉
というものを使って、間伐
集材 で伐った西春近のヒノ
キの炭焼きを試みます。材
の仕込み・火入れの後は、き
のご菌打ち。ナラの原木に
シイタケを植菌してみます。

ほだ木を持ち帰ることが出来
ます(一本の長さが1m程
度)ので、ご希望の方は大き
めの袋などをご持参下さい。
二日目は、朝に炭出し。マ
スク、タオル、軍手が必要で
す。炭もお持ち帰り頂けます
ので、ご希望の方は米袋など
をご持参ください。その後は
復習です。保科先生の山林見
学、伐木造材、測量・製図の

三班で。測量希望の方は、関
数電卓をご持参願います。
両日ともに8時30分、島崎
先生の山小屋に集合です。
なお、初日夕方からは、炭
化炉の火の番をしつつ、忘年
会を開催しましょう。山小屋
宿泊可。会費は千円程度の予
定です。幹事さん募集中。寝
袋をお持ちの方はご持参願
います。

リレー通信

山のはなし

村田 喜昭



日本は山の国である。周り
を海に囲まれた島国のため
い海の国と認識しがちだが、
少し高速道路でも走ってみ
れば一目瞭然、行けども行
けども山、山、山である。も
ちろん海の近くでは海に密着
した生活をしているわけだが、
それでも圧倒的に山への依存
度が高いように思う。そもそ
も古代文明発祥の地でこれだ
け山や木が残っているのは奇
跡である。いわゆる四大文明
発祥地は全て現在砂漠となっ

ているし、ヨーロッパも一部を
除いて木は少ない。これは気
候の影響もあるが、何より人
間が木を伐り尽してしまっ
た結果である。日本人は、八
百万の神と言われる、万物全
てに神が宿るとする宗教観に
基づいて、昔から自然と上手
共存してきた民族だったはず
である。これが現代、特に戦
後になって急に崩れてきたの
ではないかと危惧している。
国全体が常に右肩上がりの経
済成長を前提にしている現状
というのは、どこか間違っ
ていないだろうか。それもモノ
を作っているのならまだしも、
実体のない金融経済というこ
とになるともはや狂っている
としか思えない。アメリカ発
のおかしな資本主義経済を国
の歴史、伝統を無視して無闇
に取り入れてきた結果、自分
を見失いつつあるのではない
だろうか。
私は群馬で自動車の設計を
十四年ほどやってきた。いつ



先キヤバは過剰になりそうなのに、そんなに作ってどうするのか？既に世界の原油生産はピークアウトしているという説もある。いずれにしても、遅かれ早かれ石油は必ず尽きる

の頃から自分のやっている仕事に疑問を抱くようになり、一大決心して昨年十二月で会社を辞め、伊那谷の中川村に移住してきた。辞めるに当たっては将来のことなどいろいろ不安もあったが、この先ずっと自分を偽りながら仕事を続けるよりはと思い、思い切って辞めることにした。幸い妻も最初から大賛成だったので、場所の選定も含め数年がかりの大計画の末、新天地にやってきた次第である。

再生可能な循環型社会を確立しないと大変なことになりそうである。再生可能な資源として注目すべきは木材である。そう考えると、実は日本は資源大国ではなからうか。木材の利用法についても先人から綿々と引き継いできた知恵があるはずであり(実は失われつつありそうな気がして心配なのだが)、手遅れにならないうちに木材の有効活用について再考しなければならぬ。結局は、人間も動物である以上、生きていくには食料のみならずエネルギーも植物に依存するより他にないということではないだろうか。

上、毎年八十日以上山や岩場に入っていたのは今思うと驚きである。山登りの形態に沢登りという日本独自の形態がある。これは沢を登路にとる登り方で、日本では昔から普通に行われており、一形態というよりは日本の無雪期登山の原点というべき登り方である。日本独自というものは、日本以外、特に欧米には日本のような豊かな沢がないからである。山を征服するのではなく、山と同化する登り方である。山とおうか、まさにこれぞ日本の山登りといったところ。沢登りは次の点で理にかなっている。無雪期のルートとして最も明瞭、かつ最短のルートである。水の心配がなく、水を持ち歩く必要がない。岩魚や山菜など食料の現地調達が可能。流木が豊富で究極的にはガスコンロも不要。1/25,000図でルートを確認、直登も高巻きもできない巨大な滝に行き詰らないかドキドキしながら遡行していく。最も重要なフアクターは水量で、水量次第で何でもないとところが遡行不能になりたりする。山にどっぷり浸かり、知力も体力も総動員して挑む最高のアクティビティである。緑深い山と豊かな水、青い空を見ていると、日本の山はなんてすばらしいのだからとつくづく思う。先人たちが

が守ってきたものを未来に伝えていく義務が今を生きる自分たちにはあるのだと実感する。早いもので、五月にスタートした今年の森林塾も終盤にさしかかろうとしている。これまで教えてもらったことを通じ、山仕事の取っ掛かりくらいはつかめたかと樂觀的に考えている。自分がどう山と関わっていくことができるか、今後のことについてはこれからじっくり考えていきたい。できれば山仕事で生計を立てていければいいなあ。KOA森林塾講師の方々をはじめ塾生の皆さん、今後ともよろしく願います。

樹のコラム

まっさか 松房

離弁花・マツブサ科・マツブサ属の蔓性の落葉木本で六月から七月に、うすくて肌色に近いピンクの花を垂れ下がって咲かせます。花弁はわりと厚めのしつかりした感じですが、大きさは1cmくらいです。葉は互生して短枝の先に、まとまってつきまします。特徴は葉の表面に艶があり、裏と毛はありませぬ。一度見たらとても覚えやすい葉です。ちなみに蔓は左



巻き。実は秋で、藍色の小型のブドウのように、房になって付き食べられます。ただ、まだ熟していない時期に口にすると松のような香りがします。熟すと甘くてとてもおいしいです。枝や葉もそうですが、種もかむと松の香りがし、入浴剤に利用できます。松房と言う名の由来もここからきていて、実際に体験してみるとなるほど！うん。納得。と言う感じです。秋の山で作業しているときに、この松房を見つけたら、喉の乾きを潤してくれる丁度良いおやつになります。この実でマツブサワインというものも作られています。果実をあまり大量に入手できないので、結構貴重なワインのようです。

投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望、事務局まで。
TEL 0265-70-7065
FAX 0265-70-7994
E-mail: sh-sakano@koanet.co.jp
ki-hayakawa@koanet.co.jp
携帯:090-4463-0062 (開催日)
URL http://www.koanet.co.jp



松房酒を作ってしまった。アルコール度数はせいぜい1〜2%くらいですが、すごくおいしくてすぐに無くなってしまいました。(こんな事書いたら酒税法にひっかかるのかな?)色もとてもきれいな赤になります。この松房に良く似た実がある、青つづらふじという種があります。この実は食べても全然おいしくありませんが、熟した果実や茎、根は昔から漢方に使われている植物で、効能は利尿・鎮痛・解熱に効果があるそうです。花は小さな白い花ですが、あまり目立たないです。この木の葉の形はハート形で、艶もないので區別はしやすいと思います。

「鶯」

おわりに

敷き詰められた落ち葉と枝先にのこる葉の彩りの向こうに、うっすらと白い雲がたなびく空。静かな秋が過ぎてゆきます。